

# ニュース

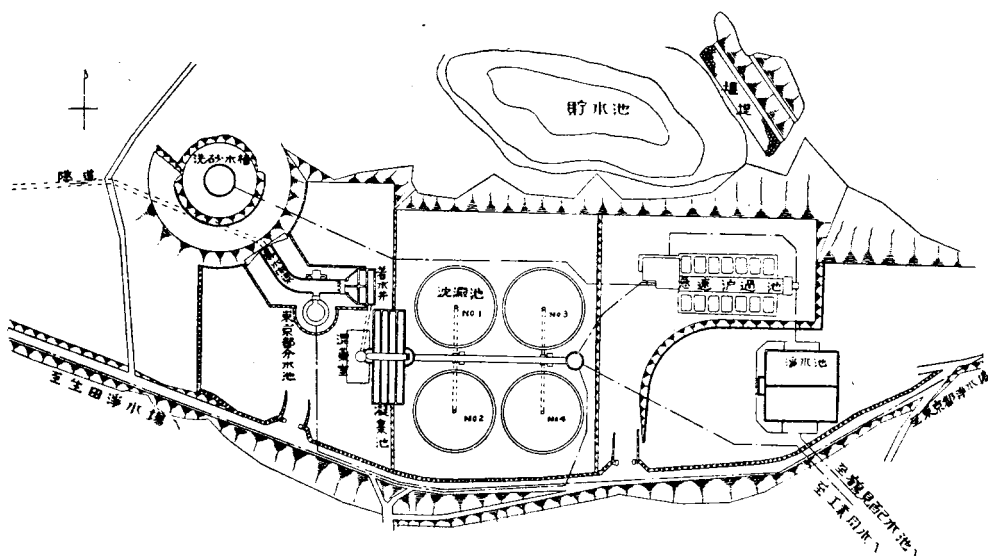
## ○川崎市長沢浄水場について

長沢浄水場は川崎市の第4期上水道拡張工事の一部として、総工費7億円の予算をもつて、昭和25年4月より工事に着手し、昭和28年3月竣工の予定で現在工事中である。現在迄に完成せる部分は着水井・凝集池・混薬室・沈澱池の一部及びそれ等の附帯設備であつて、現在迄に完成した沈澱池迄の施設を使用して、

8月より既設生田浄水場へ沈澱水を送水開始の予定である。

本工事計画概要 長沢浄水場の原水は相模川を水源とし、相模川河水統制事業による導水隧道(内径6m馬蹄型)6.2km、川崎横浜共同隧道(内径3.5m馬蹄型)4.2km、川崎市導水隧道(内径2.6m馬蹄型)22.9km計33.3kmの導水隧道を経て到達する。着水量は1日480,000m<sup>3</sup>で、そのうち230,000m<sup>3</sup>は着水井より原水のまま東京都へ分水し、残余の250,000m<sup>3</sup>に対し凝集、沈澱処理を行う。沈澱水は工業用水に100,000m<sup>3</sup>、既設生田浄水場へ50,000m<sup>3</sup>分水し、残余

図—1 川崎市長沢浄水場平面図



の沈澱水 100,000m<sup>3</sup>に対し場内急速濾過池において濾過処理を行い、浄水池に貯留した後鶴見配水池へ送水すべく計画されている。本浄水場にある設備は着水井・混薬室・凝集池・沈澱池・急速濾過池及び浄水池等であるが、これ等諸施設のうち特色のある施設について述べる。

1. 凝集設備 凝集施設にはその重要性に鑑み、現代

浄水技術における最も漸新な設備を網羅して、本浄水場の特質をなしている。薬品混和及び凝集の方式は原水の一部に硫酸礬土溶液を加え、これを拡散ポンプにより充分拡散せしめたものを混薬池において再び残余の原水に混じり、急速攪拌機によつて薬品を原水中に速かに拡散させ、凝集池にはフロキュレータを設備して凝集せしめるもので、硫酸礬土の注入は湿式と

写真—1



しこれが溶解には新しいところみとして連続溶解式溶解注入法を採用している。拡散ポンプ設備及び混薬池は礬土溶解設備と共に混薬室内に収められている。拡散ポンプによる薬品の混和は大量の原水中に薬品を速かに拡散させるのに最も効率のよい方法で、我国水道において初めて取上げられた施設であり、フロキュレータは軸流式としては我国最初に計画されたものである。また硫酸礬土の連続溶解式は従来非常に困難であった溶解注入法の欠点を改善すべく、川崎市水道部において考案された方法で、水道界の注目を浴びているものである。

薬品混和室にはその他に前処理管理室とこの附属原水試験室を有し、硫酸礬土注入量設定器及び自動注入調節器を設けて、原水試験室の試験結果により直ちに礬土注入量を設定できる外、原水量・原水 pH・注薬

後 pH・水溫・原水濁度・沈澱水濁度等の電子管式自動記録計及び前処理操作表示灯をそなえ、原水の性質を自動的に記録に残し、また前処理操作状況及びその結果がすべてこの室で判明するように計器類が完全に整備されている点も特質の一つである。

2. 沈澱池 沈澱池は内径 47 m の円形溢流型 4 池で、1 池の滞留時間は 3.7 時間であつて、各池にはクラリファイヤーを設け 1 時間 1 回転の運転である。

3. 急速濾過池 濾過量は 100 000 m<sup>3</sup>/day でこれに対し 1 池濾過能力 9 000 m<sup>3</sup>/day の急速濾過池 12 池と予備池 2 池を有する。濾過池はホイラー式で濾過速度 120 m/day を標準として計画されている。また固定噴射式表面洗滌装置をそなえている。14 池の中 1 池には濾過状態の観測用の設備を有する。

(川崎市水道部 田上 稔)

○只見川電源開発工事始まる

色々政治的の話題を提供していた只見川の電源開発も懇々本年 4 月より本格的な工事を始めるに至つた。

只見川電源開発計画は尾瀬沼を水源とする只見川において、最下流の揚川発電所に至るまでの落差 1400 m を利用し、この間只見川上流部に 4 ヶ所、支流伊南川の上流に 1 ヶ所合計 5 ヶ所に全有効貯水量 14.5 億 m<sup>3</sup> の大貯水池を築造し、新設 15 発電所、既設の出力増加 5 発電所と共に最大 170 万 kW 年間 57 億 kWh に達する大電力を得ようとするものである。

このうち本年 4 月より工事を着手したものは、その中流部に位する柳津、片門両発電所の新設と宮下発電

所の増設工事である。これら発電所の概要を示せば表-1 の通りである。

写真-1 片門発電所鳥かん図

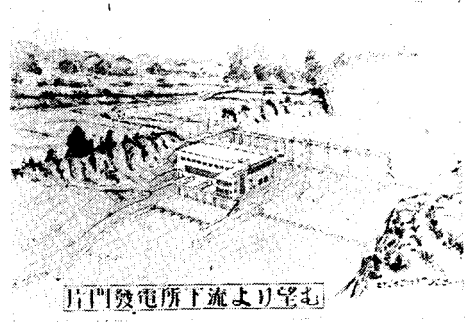


表-1

	最大使用水量 m <sup>3</sup> /sec	有効落差 m	最大発電力 kW	年間発電電力量 10 <sup>6</sup> kWh	工 事 費			送電開始予定
					総工事費 (百万円)	kWh 当り円	kW 当り円	
柳 津	320.0	25.68	68 000	350	3 400	9.70	50 000	昭. 28.8
片 門	320.0	19.34	51 000	271	2 800	10.30	55 000	昭. 28.12
宮 下 増 設	200.0	38.80	64 200	247	2 490	10.08	38 400	昭. 28.4

○建設次官に稲浦会長

今回建設省の機構改革により本学会々長 稲浦鹿蔵

氏は建設次官に、本学会理事富樫凱一氏は道路局長に就任した。なお今回の改革により相当の異動が行われたが詳細は次号に登載の予定である。